

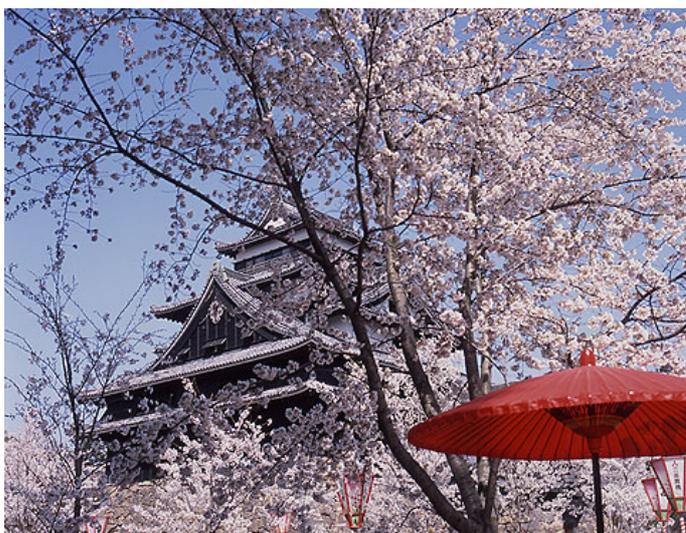
第2回大橋川周辺まちづくり検討委員会で
出された意見に関する参考資料

目 次

(1) 松江城について (A-2、A-4 関連)	1
(2) 江戸時代の城下町地図 (A-3、A-4 関連)	2
(3) 大橋について (A-7、A-8、A-9 関連)	3
(4) 松江夜曲の歌詞 (A-6 関連)	4
(5) ラフカディオハーンの見た風景について (著書より抜粋)(D-13 関連)	5
(6) 灯籠流しについて (E-10 関連)	6
(7) ホーランエンヤについて (B-9、D-9 関連)	7
(8) 如泥石 (小林如泥) について (B-10 関連)	8
(9) 出雲国風土記 (矢田の渡し周辺) について (D-20、D-21 関連)	9
(10) 多賀神社について (B-4 関連)	10
(11) 国際文化観光都市について (J-2 関連)	11
(12) 景観法について (D-12 関連)	11

(1) 松江城について (A-2、 A-4 関連)

- ・堀尾吉晴により 1607 年に着工、1611 年にほぼ完成。
- ・鳥が羽を広げたように美しいことから別名「千鳥城」と言われる。
- ・城郭の広さは東西 360 m、南北 560 m。
- ・天守閣は外観五層、内部六階、高さは約 30 m で姫路城に次ぐ規模。国の重要無形文化財。
- ・天守閣は、一二層が黒塗りの下見板張り、最上階が遠見櫓で望楼式の実践本意の質素な造りで、桃山時代初期の質実剛健な姿を見せる。
- ・木彫り青銅張りの鯨は、高さ約 2 m あり、現存する木造のものでは日本最大のものである。



(3) 大橋について (A-7、 A-8、 A-9 関連)

- ・ 初代大橋は、江戸時代初期の1608年松江城築城のため、堀尾吉晴により架設されたものである。
- ・ 初代大橋を架設するときの逸話として、川を鎮めるため「雑賀町の源助」を人身供養として捧げられた、との伝説がある。
- ・ 第3代元明大橋（1660年）から洪水にも耐えられる本格的な橋となった。
- ・ 3代から13代までの橋名は、普門院の住職によって命名されていた。
- ・ 「大橋」という橋名は、第14代からである。
- ・ 現在の大橋は、第17代目で昭和12年に完成したものである。
- ・ 現在の大橋は、松江市のシンボルとして市民はもとより、観光スポットの一つとして観光客にも愛されている。特に御影石の欄干と唐金の擬宝珠が歴史と風情を漂わせ、夜はライトアップされ、幻想的な雰囲気漂わせている。



(4) 松江夜曲の歌詞 (A-6 関連)

松江夜曲

西條八十 作詞 古関裕而 作曲

松江大橋 唐金擬宝珠
なぜに忘れぬ 忘れぬ
さくら春雨 相合がさで
君と眺めた 嫁が島
まつまつ松江は 君を待つ

二夜逢わねば 眠れぬ枕
ひびくろの音 波の音
恋の湖 雨戸を開けりゃ
月にほんのり 千鳥城
まつまつ松江は 君を待つ

松江自慢は 小泉八雲
のこる縄手の 鳥屋敷
今も咲きます 国際愛の
色香なつかし 杜若 (かきつばた)
まつまつ松江は 君を待つ

水はうつくし 人情はやさし
松江絵の町 湖 (うみ) の町
大社詣りの つい日がのびて
七日ながめた 松江富士
まつまつ松江は 君を待つ

(5) ラフカディオハーンの見た風景について(著書より抜粋)(D-13 関連)

『知られぬ日本の面影』より 吉田 薫 訳

このようにして、この町の活気づいた早朝の物音によって目を覚まされる。私は小さな障子窓をすべらせて開き、川によって仕切られた下の庭から立ち上がった、柔らかい緑の雲のような若葉ごしに朝を見まわす。前には遠くの側のあらゆるものが震えて映っている。大きな宍道湖に開く大橋川の広く鏡のような川口がちらちらと光る。宍道湖は右手に茫洋と広がり、くすんだ灰色の峰々が縁取る。川を隔てたちょうど私の向かい側では、青みがかった屋根の日本の家々が雨戸を閉め切っている。明るいけれどもまだ日の出ではないので、家々は箱のように閉じられているのだ。

けれどもおお、なんという魅惑的な光景だろう。眠るように柔らかいかすみに包まれた朝の、初めはまぼろしのようなであった魅力的な色は、目に見える蒸気に分解された！ うすく淡く彩られたもやの長い腕が遠くの湖縁をぼんやりとさせる。古い日本の画帳で見ることができると長い漠とした帯。実際の現象を見なければ、芸術的な奇想だと思いに違いない。山々のふもとはすべて、それらによってベールをかけられている。そして、はかり知れない長い薄織のように、凹凸のある高々とした峰々を横切って伸びる。(この特異な様子は日本語で「棚びく」という)。そのため、湖は実際と比較にならないほど大きく見える。それは現実の湖ではなく、夜明け空と同じ淡い彩りで交じり合った美しく幽玄な海である。一方、峰々の稜線は、もやから島のように浮かび上がり、そして長々とした土手道のような連丘が幻想的な姿で伸びつつ視界から消える。美妙なる混沌。優美な濃いもやが、ゆっくりと、非常にゆっくりと明けていく。太陽の黄色の縁が視界に入って来る。暖かさに満ちた幽玄なすみれ色と乳白色の細長い光線が流れを横切って差し込む。梢がほのかに燃える。そして向こう岸の高い建物の無塗装の前面は、心地よい薄もやを通して木の色からもやがかかった金色に変わる。

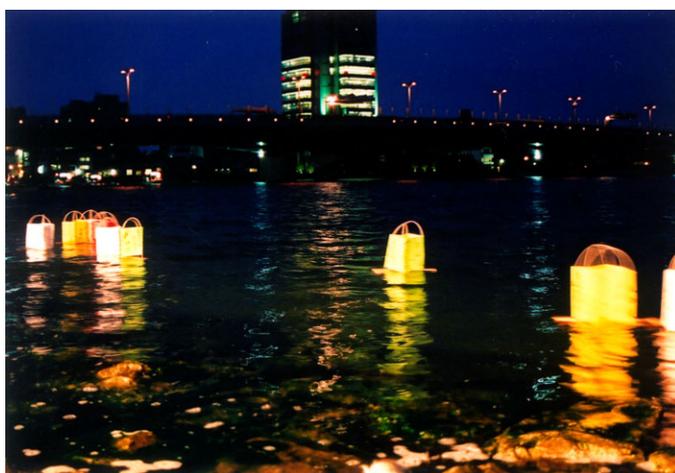
太陽の方向に、長い大橋川を見上げれば、多くの橋柱に支えられた木造の大橋の向こうで、一隻の船尾の高い平底帆船がちょうど帆を揚げるところである。かつてこれほど幻想的で美しい船を見たことがあっただろうか。それはもやによって理想化された東洋の海の夢である。帆船のまぼろし。今まぼろしは、雲のように光をとらえ、青白い光のもとで浮遊する半透明の金色のかすみの姿だ。

『神々の国の首都』より 森亮 訳

光は夢の中にさす光のように穏やかで、あのどぎついほどの色彩はない。この東洋の自然には強烈な色などというものはない。海を見ても空を見ても、色彩というよりは色合いと言うべきもののばかりで、しかも霞のような淡い色合いである。……私の前には広々として美しい湖が、柔らかい光でにぶく輝いて眠っている。……日は沈み始め、色彩の微妙ですばらしい変化が水と空とに現れる。……くすんだ濃い紫の靄が幅広くたなびき、もうろうとかすむ紫が更に中天に向かうあたりは薄く淡い朱やかすかな金色になり、それがまたほのかにも淡い緑色を経て、大空の青さに溶け込む。

(6) 灯籠流しについて (E-10 関連)

- ・ 初代立正佼成会松江教会長が東京隅田川の灯籠流しの経験を生かし、昭和40年から実施された。
- ・ 灯籠流しは各家の諸精霊を供養し先祖の成仏を願うため、地域の発展の風物詩として、また国際文化観光都市としての取組みを目的としている。
- ・ 昭和41年からは松江仏教会でも実施されるようになる。
- ・ 立正佼成会は松江市役所前付近から、松江仏教会は大橋南詰付近から流している。



(7) ホーランエンヤについて (B-9、D-9 関連)

- ・祭りの正式名は「松江城山稲荷神社式年神幸祭」
- ・宮島の管絃祭、大阪天満の天神祭と並ぶ日本三大船神事のひとつで、12年ごとに開催される
- ・松江の人は「御城内お稲荷さんの出雲郷行き」といい、八束の人は「稲荷さん曳き」というが最も通称になっているのが「ホーランエンヤ」である。
- ・起源は、松江城主松平直政公が出雲に入国して10年目(1648年)は天候不順で不作が予想されたので、城山稲荷神社の御神霊を阿太加夜神社(東出雲町出雲郷)にお運びし、1週間にわたり豊作を祈ったのが始まりである。
- ・その後、1808年の御神幸の折神輿船が暴風雨のため座礁しかけたのを馬潟の漁師が助け、阿太加夜神社に無事送り届けた故事により權伝馬船が加わるようになった。
- ・民衆の幸福と豊作を祈願するこの船神事は、以来12年毎に船渡御による神幸祭として行なわれ、古くからその年は豊作であったといわれている。
- ・五地区から繰り出す權伝馬(かいてんま)と呼ばれるおどり船を先頭に、神楽船、神輿船、お供の船などの船行列が延々と1kmにわたる。
- ・金色の宝珠を中心に色とりどりの旗、のぼりをなびかせ、豪華な時代絵巻となって、宍道湖、大橋川、中海を彩り、古くから伝承されてきた歌舞伎の衣装で着飾った踊り子や、おはやしの子供たち、そして權漕ぎの若い衆など「ホーオオエンヤ、ホーランエーエ、ヨヤサノサ、エーラノランラ」と唄い踊る權伝馬船が見る人を魅了する。



(8) 如泥石 (小林如泥) について (B-10 関連)

◇如泥石

- ・ 小林如泥が考案したといわれる来待石で造った臼型の波消石。嫁ヶ島の周囲等に現存する。

◇小林如泥 (1753年～1813年)

- ・ 松江大橋に近い大工町 (今の灘町) に生まれ、本名を安左右衛門といった。
- ・ 松江藩七代藩主松平治郷 (不味) のおかかえ彫工師として指物、彫刻、建築などに名作を残している。
- ・ 酒好きで「酔って泥の如し」という意味で、如泥という名が治郷から与えられたといわれている。

【宍道湖岸 (白潟公園付近)】



(9) 出雲国風土記（矢田の渡し周辺）について（D-20、D-21 関連）

- ・ 今日、松江の市街地を東西から挟み込んでいる宍道湖と中海は、風土記時代は、一括して「入り海」と呼ばれており、この「入り海」の真ん中狭くなっている部分が「朝酌促戸^{あさくみのせと}」である。
- ・ 「朝酌促戸」には渡し船が置かれ、そこに連絡する形で隠岐国へと通ずる道が、出雲の政治の中心地である出雲国庁から島根半島千酌浜（隠岐渡し）まで延びていた。
- ・ そのような道や「入り海」そのものを利用して、四方から人々が集まり市も形成された。さらに、「入り海」の東西から、多くの魚が流れ込む格好の漁場でもあった。
- ・ 朝酌の人々は、筥と呼ばれる漁具でこれらの水産物を捕獲していたという。
- ・ ちなみに、風土記時代の渡し船とは位置も性格も異なるが、今も朝酌には「矢田の渡し」があり、かつて漁がなされていたであろう場所には、神々がエビス神の釣りを見学したという伝承を持つ魚見塚古墳が存在する。

あさくみのせとのわたり かよひぢ はら まなか わたり うへ わた
朝 酌 促 戸 渡。東に通道あり、西には平原あり、中央は渡なり。則ち筥を東西に互す。

いでい くさぐさ と き うへ ほとり きあつま おどろきは
春秋に入出る大き小さき雑の魚、臨時として筥の辺に来湊りて、駮 駿ねて、風のごとく

お つ うへ やぶ ひを な と
押し、水のごとく衝き、或るは筥を破壊り、或るは日魚と製りて鳥に捕らる。大き小さき 雑

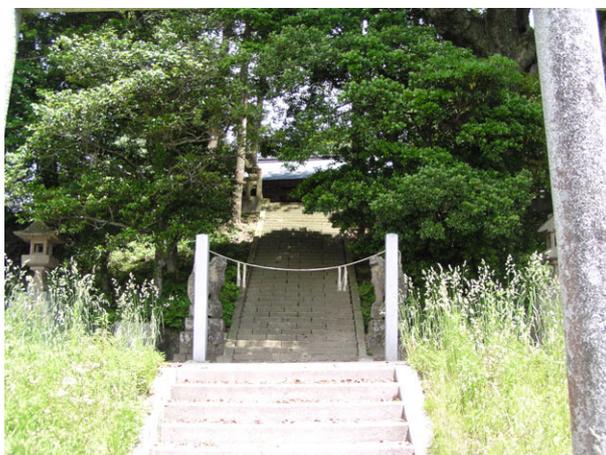
さわ にぎは いちびとよ も つど おのづから いちくら
の魚にて、浜譟がしく、家闌ひ、市人四方より集ひ、自然に麿を成せり。

あさくみのわたり ばかり くのにまつりごとのや うみべに
朝 酌 渡。広さ八十歩 許あり。 国 庁 より海辺に通ふ道なり。

（訓読は、加藤義成著「修訂 出雲国風土記参究」による）

(10) 多賀神社について (B-4 関連)

- ・祭神は、スサノオノミコト (素戔鳴尊)、イザナギノミコト (伊弉諾尊)、イザナミノミコト (伊弉冉尊)。
- ・神在祭 (11月25日、26日) は、佐太神社より直会のために神々が参集すると伝承されている。この直会の邪魔をしないよう、境内に人の出入りができないように、参道2ヶ所に注連縄を張る。26日、早朝、この注連縄を外すことで多賀神社の神在祭は終了する。特に神社での神事はなく、神々は自然に当社に集まり、自然に去っていくと考えられている。地域の人々も直会の邪魔をしないように、神社への出入りはせず、両日は静かにしていたという。



(11) 国際文化観光都市について (J-2 関連)

◇松江国際文化観光都市建設法制定の経緯

- ・松江市が明媚な風光と、多くの文化財を保有しラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の文筆を通じて、世界的に著名であることにより、同市を国際文化観光都市として建設することは、国際文化の向上、世界恒久平和の理想の達成、わが国経済の発展につながるとし、この目的を達成するためには法的措置を講ずる必要があると考え、市長は昭和25年11月14日臨時国会に法律案を提出した。そして、同年12月13日内閣総理大臣から市長に正式の通知が発せられた。
- ・この法案は憲法の定めるところにより、「住民投票において過半数の同意を得なければこれを制定することが出来ない。」となっているため、昭和26年2月10日住民投票が実施され、圧倒的多数の賛成を得た。そして、同年3月1日付で日本国憲法第95条の規定に基づく松江国際文化観光都市建設法が公布された。

◇松江国際文化観光都市建設法の目的（松江国際文化観光都市建設法第1条）

第1条 この法律は、松江市が明びな風光とわが国の歴史、文化等の正しい理解のため欠くことのできない多くの文化財を保有し、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の文筆を通じて世界的に著名であることにかんがみて、同市を国際文化観光都市として建設し、その文化観光資源の維持、開発及び文化観光施設の整備によって、国際文化の向上を図り世界恒久平和の理想の達成に資するとともに、わが国の経済復興に寄与することを目的とする。

(12) 景観法について (D-12 関連)

- ・景観法は、都市、農山村等における良好な景観の形成を促進するため、景観計画の策定その他の施策を総合的に講ずることにより、国民生活の向上並びに国民経済及び地域社会の発展に寄与することを目的に、（景観法第1条より。）平成16年12月に施行された。
- ・松江市は平成17年5月に景観行政団体の指定を受け、景観計画・景観条例を平成19年3月に策定し、平成19年度の早い時期の施行を目指している。
- ・景観計画区域を指定することにより、建築物や工作物の建築行為等に対する届出・勧告を基本とするゆるやかな規制誘導を行う。
- ・また、景観計画区域内では、積極的に良好な景観の形成を図る地区について、景観地区の指定を検討していく考えである。（建築物等のデザイン・色彩・高さ・敷地面積などについての総合規制。）